

大阪の景観構造の分析



鳴海 邦 碩*,
久 隆 浩**

1. 景観からのまちづくり

わたしたちの研究室では、ここ数年来、都市景観についての研究をつづけている。まちの景観は、建物や垣根、道路、電柱、看板、さらには人々の活動などさまざまなものからできあがっている。景観とは、こうしたいろいろな要素が寄り集まってつくられるまちの表情である。生活空間の表情が視覚的にとらえられたもの、それが景観であり、わたしたちは別の言葉で「見える環境」とよんでいる¹⁾。

さまざまな要素が、巧みに組み合わせられているとき、それはいい景観となる。いい景観とは、単に美しい景観だけをさすのではなく、楽しい景観や活気のある景観も、それがしかるべき場所にしかるべき姿で存在すれば、それらもまたいい景観とよぶことができる。

なぜ、わたしたちが景観にこだわっているかというと、景観は目にみえるまちの姿であり、人々にもっともわかりやすいものであるからである。自分たちがくらすまちをよりよくしていくために、そのてがかりとして景観がもっともわかりやすいのではなからうか、と考えている。よりよい景観をかたちづくること、それはうわべだけを飾ることではなく、よりよいまちづくりの成果としてできあがるものである。

2. 近世大坂の景観構造

現在のまちのありようを考えていく際に、歴史的なものを手がかりにすることがよくおこな

われる。それは、わたしたちが現在生きている生活空間は、長い年月のうえに培われてきたものであり、いにしえからたくさん人々が暮らしてきたその痕跡のうえに、現在のまちができあがっているからである。したがって、現在の空間を理解するには、こうした過去から蓄積された情報を読みとることが必要になる。かつて、人々がどのように空間を捉え、空間と関わってきたのかを理解することが、現在のまちを理解するためにたいへん役にたつ。

そこで、わたしたちは、現在の大阪の景観を理解するために、いにしえの大坂の景観構造を読みとることを試みた。材料は幕末の大坂を描いた『浪花百景』という図会である。一養斎芳瀧、南亭芳雪、一珠斎国員という三人の絵師に

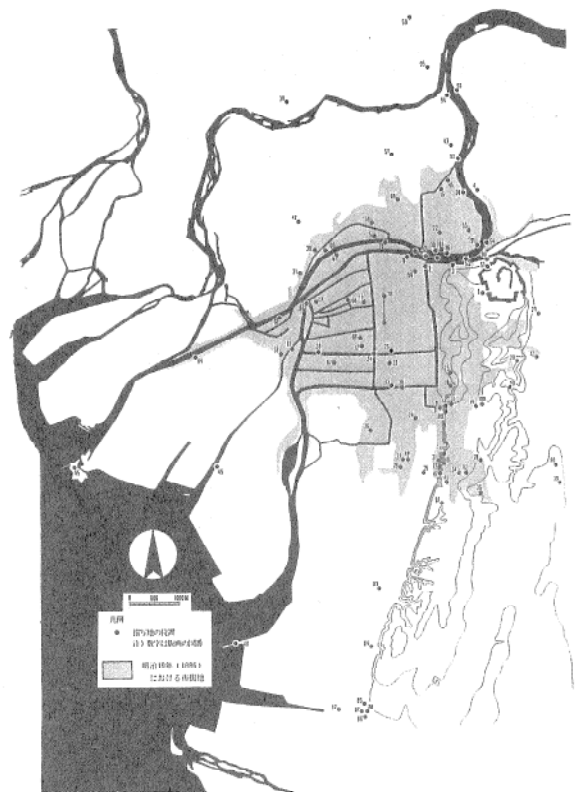


図1 『浪花百景』に描かれた場所の分布
(作成・大西二州)

*鳴海 邦碩 (Kunihiro NARUMI), 大阪大学工学部環境工学科, 助教授, 工学博士, 都市計画学

**久 隆浩 (Takahiro HISA), 大阪大学工学部環境工学科, 助手, 工学博士, 都市計画学

よって描かれたこの風景画は、当時の大坂の都市風景をわたしたちに伝えてくれる。

まず、『浪花百景』に描かれている場所の分布をみてみよう。図1でわかるように、上町台地や大阪城周辺の大川沿いをはじめとする水辺に描写地が多い。大阪の地勢は、淀川と大和川の河口に開けた平坦な沖積平野と小高い上町台地から成り立っている。景観に変化を与えるものとして、こうした地勢を巧みに利用していたことがうかがえる。上町台地と市街地が広がる沖積平野の高低差を利用して、上町台地から市街地を見おろす、あるいは、市街地から上町台地を見上げる構図が選ばれている。また、川ごしの対岸のながめ、あるいは、橋から川面を眺めるなど、川と陸が織りなす微妙な高低差を利用して、水辺の景観がつけられていた。

3. 近世大坂の景観の特徴

① 上町台地の景観

上町台地の眺めでは、台地の西側と東側では景観のタイプが異なっている。

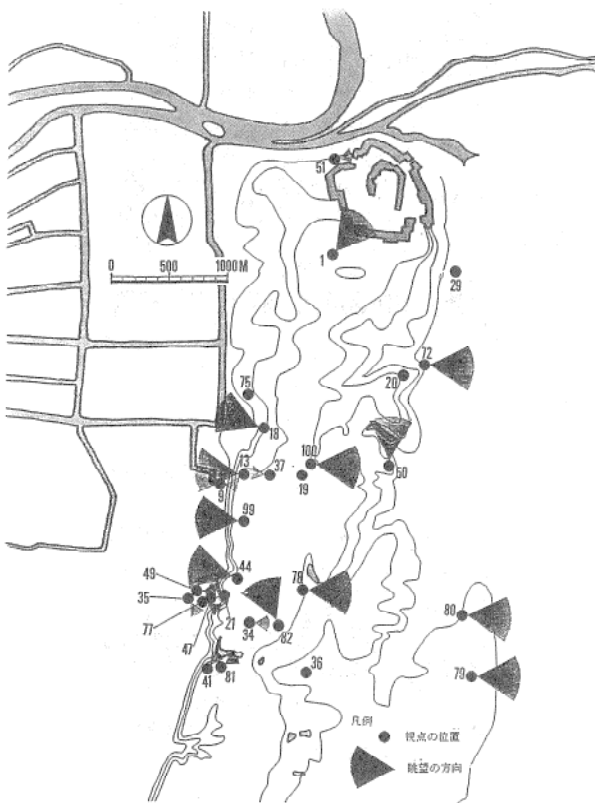


図2 上町台付近の眺めの分布 (作成・大西二州)

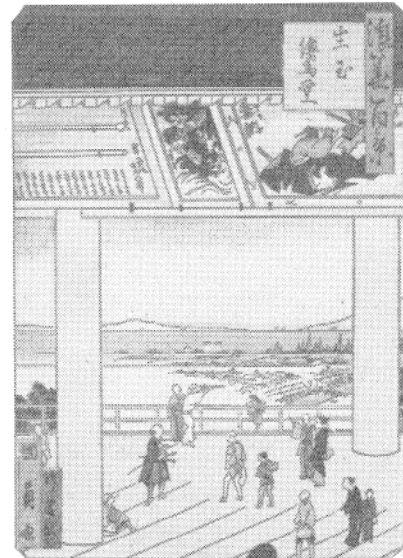


図3 上町台地から西を望む (浪花百景・第13景・生玉絵馬堂)

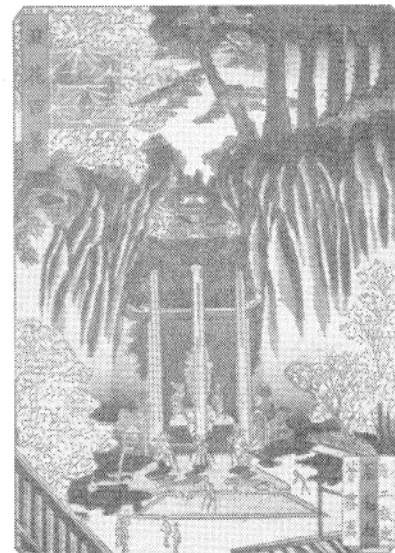


図4 上町台地の西崖下からの眺め (浪花百景・第49景・新清水紅葉坂籠)

台地の西側の景観は二つのタイプに分かれる。ひとつは台地の上からの眺め。台地の西は崖になっており、そのため眺めがよい。眼下にひろがる市街地ごしに遠く大阪湾を望むことができる(図2, 3)。また、台地の下からの景観は、崖がもたらす地形の変化を巧みに利用したものが多い。坂や滝をはじめとする高低差を生かした眺めが西崖の下からの景観の特徴である。図会もこうした変化に富む近景を詳細に描いている(図4)。

一方、上町台地の東側は、急峻な西崖とは対照的になだらかな斜面となっている。それは、

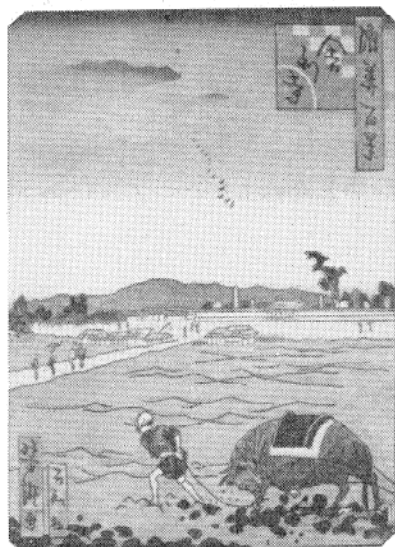


図5 上町台地から東を望む（浪花百景・第79景・舍利寺）

広大な河内平野へとつながり生駒山地へ達する。したがって、東側を描いた図会は、河内平野の田園風景ごしに遠く生駒山地を見渡す構図になっている（図5）。

② 水辺の景観

「水の都」と呼ばれる大坂であるが、眺めの面でも水辺が重要な位置にあった。事実、『浪花百景』でも水辺を描いたものがじつに60景もみられる。水辺にはさまざまな景色が存在する。水面ごしの対岸の風景、橋から見おろす景色、舟から見上げる景色など、水面と岸边、橋の微妙な高低差が眺めをゆたかにしていた（図6, 7）。また、屋形舟をくりだしておこなわれる宴の風景や河岸の市場風景、荷揚場など川

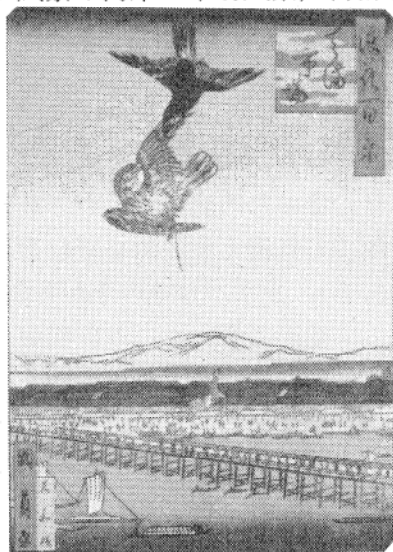


図6 川ごしの対岸風景（浪花百景・第16景・天満市場）

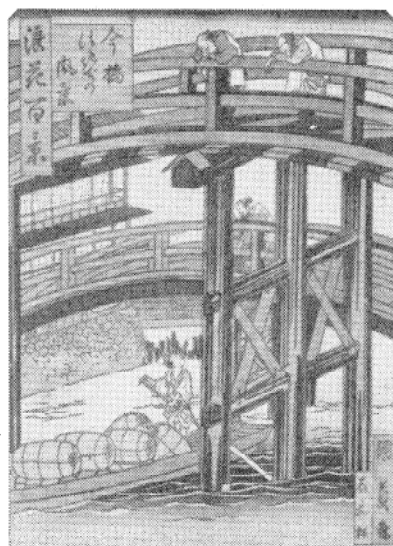


図7 橋と川面の高低差を活かした眺め（浪花百景・第2景・今橋つきぢの風景）

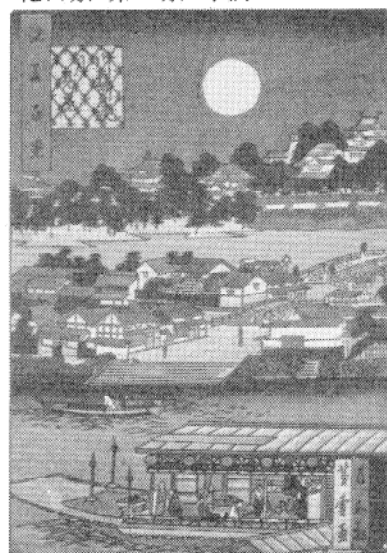


図8 屋形舟を浮かべて月見の宴（浪花百景・第91景・川崎の渡し月見景）

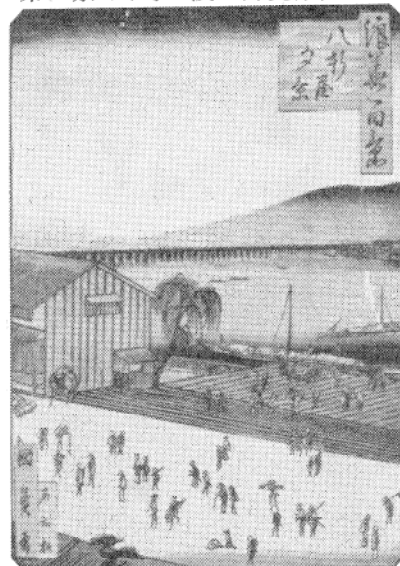


図9 船着場の賑わい（浪花百景・第3景・八軒屋夕景）

面や川岸でくりひろげられるさまざまな活動も風景に彩りをそえていた(図8, 9)。

③ ランドマークの景観

江戸では、富士山や筑波山が明快なランドマークとして景観をかたちづけていた。一方、大坂ではその平坦な地勢ゆえに、山などの地形がランドマークとしてとらえられることはほとんどなかった。そのかわりに、大坂のまちでは、高層の建造物がランドマークとして重要な役割を担っていた。

平坦な市街地にあって、天守閣や寺院の塔などがランドマークとして景観のアクセントとなっ

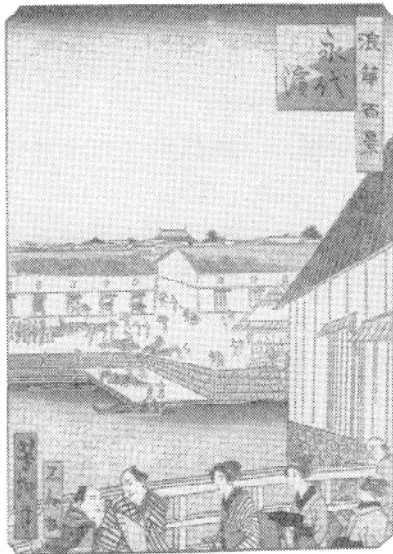


図10 ランドマークとしての高層建築。遠景で一段高いのが本願寺の屋根である(浪花百景・第68景・永代濱)

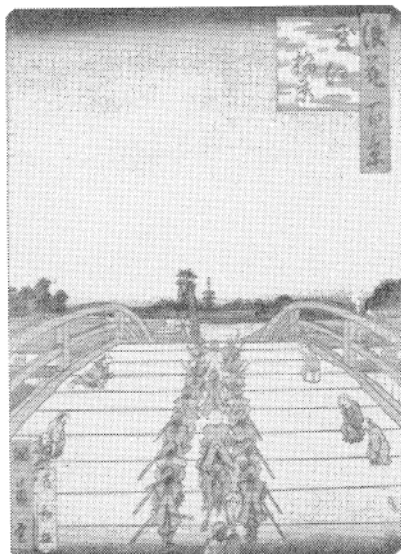


図11 ランドマークとしての火の見櫓。橋の向こうに火の見櫓が見える。さらに遠くには四天王寺の五重塔も見えている(浪花百景・第60景・玉江橋景)

ていたのである(図10)。具体的には、大坂城や北御堂、南御堂、四天王寺などである。また、当時は火の見櫓も重要なランドマークとなっていた(図11)。

平坦な市街地にあっても、こうした眺めの高低差を巧みに利用して景観を演出していたことがうかがえる。

④ 市街地の景観

市街地では、やはり賑わいの場が描かれている。市場や芝居小屋、遊廓といったきわめて都市的な風景がこうした場所では展開される。往来する人々の姿も都市景観の重要な要素であり、活気ある都市風景がいきいきと描かれている(図12)。



図12 盛り場の賑わい(浪花百景・第56景・三井呉服店)

4. 浪花百景から学ぶ現代大阪の景観整備

このように、『浪花百景』を素材としてかつての大阪の景観構造を分析してきたわけであるが、その成果から現代の大阪の景観整備について学ぶべき点は多い。

まず、地勢的な特徴では、台地や水辺といった地形の「きわ」が、その高低差を利用して景観をゆたかなものにしてきた。建物が建て変わっても、地勢はそこに手をつけないかぎり残っていく。現に、上町台地は、現代の大阪にあってもその小高い姿を保っており、また、たくさんの川が埋め立てられたものの、それでもまだ多くの河川が流れている。

しかし、その景観的な姿はすっかりと変貌してしまった。小高い上町台地は、その前に建ち並ぶ高層ビルによって目隠しをされ、また、水辺は人々の視線に触れなくなっている。もう一度、地勢を大切にしたい景観整備を考え直さねばなるまい。

また、ランドマークとしての高層建築では、大阪城や四天王寺をはじめとするかつてのランドマークたちは、ランドマークとしての価値をすっかり失っている。大阪を代表する大阪城は、まわりに建ち並ぶ超高層建築の陰にかくれ、じっくりさがさないと見つけられないまでになっている。また、つぎつぎと建てられていく超高層ビルは、高さばかりを競いあい、お互いにランドマークとしての価値を傷つけあっている。つまり、より高いものが建てられると、かつてのランドマークの価値は半減してしまう。そして、超高層ビルが無秩序に林立してしまうと、どれもランドマークになりえない状態になってしまう。超高層ビルには、ランドマークにふさわしい品格のデザインと立地場所を十分に考慮して

もらう必要がある。

また、市街地の景観では、かつての盛り場がもっていた楽しくいきいきとした都市景観が必要である。そのためには、まちなみ、とくに建物の低層部のデザインが重要になる。個々のビルがバラバラにデザインされれば、まちなみとしての一体感、連続感が損なわれ、歩いていても楽しくないまちなみができあがってしまう。街路に建物の表情がにじみだし、それがつらなっているデザインが、建物の低層部に欲しいものである。

参 考 文 献

- 1) 鳴海邦碩編、『景観からのまちづくり』，学芸出版社，1988
- 2) 鳴海邦碩編、『商都のコスモロジー』，TBSブリタニカ，1990
- 3) 久 隆浩，「〈浪花百景〉にみる名所空間の構造」，『季刊自然と文化』，1990年新春号
- 4) 『浪花百景（復刻版）』，立風書房，1976

